

## 〈2〉なぜインドはロシアに依存することになったのか： 背景と展望

ハドソン研究所 研究員 長尾 賢

### はじめに

ロシアがウクライナへの侵略を開始した2月以降、ある国の動向に注目が集まるようになった。インドである。インドは元来、独自外交を追求する「戦略的自律」「非同盟」として知られてきたが、近年、アメリカとの関係が進展し、日米豪印 QUAD の枠組みなどで日本とも関係が深まってきていた。だから、各国は、ロシアのウクライナ侵略に際し、インドが日米などと協調して、ロシアに厳しい態度を示すのではないかと期待した部分もあったものと思われる。しかし、実際に起きたことは、インドがロシアに強く配慮し、徹底的な中立を志向したことである。インドは本当に QUAD の仲間ではないのか、本当はロシア陣営の国なのではないか、といった疑念がわいたのである。そこで本稿では、インドがロシアのウクライナ侵略で追及した姿勢を分析するとともに、そのような姿勢が、どのような背景をもって形成されてきたのか、歴史的な経緯と現状、今後の方向性について、分析するものである。

### 1. ウクライナ侵略時に見せたインドの対露配慮

2月24日のロシア、ウクライナ侵略開始以降、インドの外交姿勢はどのようなものだったといえるだろうか。ロシアのウクライナ侵略に関しては、当初、

西側諸国を中心に国連安全保障理事会でロシアを非難する決議の採決が行われた。これに関し、インドは棄権している。その後、国連総会でも同種の採決が行われ、インドはそこでも棄権した。その後、西側諸国を中心に対ロシア経済制裁の中で、ロシアからの原油の輸入を止めることが合意された。その際、インドはロシアからの原油輸入を増やした。さらに、ウクライナ難民支援のために国連が計画した、インドと UAE にある倉庫からの人道支援物資の輸送に関しても、日本との間でトラブルになった。日本は、この輸送を自衛隊機で行う予定であったが、インドは、自衛隊機の領空通過は認めつつも、着陸を許可しなかった。インドは、ロシアに制裁をかけている日本の軍用機が繰り返しインドから離陸し、ウクライナ周辺のポーランドやルーマニアに物資を運ぶことを懸念したものとみられる。つまり、このようなインドの姿勢を見ると、ロシアのウクライナ侵略に際し、インドは、ロシアに対して強く配慮していたのであった。

ただ、インドはロシアに配慮しつつも、今回のウクライナ侵略を歓迎していないことも、また明らかであった。それはインドと中国の姿勢の違いでみてとれる。国連安全保障理事会では、ロシアも人道状況に関する決議案を出したが、インドはこれにも棄権した。この決議に賛成したのはロシアと中国だけであった。さらに、西側各国の対ロシア経済制裁に関して、中国は経済制裁そのものも非難しているの

に対し、インドは、対ロシア経済制裁を非難してはいない。インドは独自にウクライナ難民に対する人道支援も実施している。そして、ウクライナ・キエウ近郊のブチャでロシア軍による戦争犯罪が取り上げられた際は、インドはロシアという名指しは避けながらも、この行為を激しく非難した。

このようなロシアのウクライナ侵略に対するインドの対応を見てみると、インドは、ロシアのウクライナ侵略をいいものだとは思っていない。だから、本来なら、インドはロシアを非難してもおかしくないのである。それにもかかわらず、ロシア非難を徹底的に抑えている背景には、ロシアに対する配慮が必要だと感じていることが原因と考えられる。なぜここまでロシアに対して配慮しなければならないのか、そこには歴史的背景からくるインドの状況があるだろう。

## 2. 印露関係の歴史的経緯

### (1) 中国に対抗するためのアメリカとロシア

なぜインドはロシアに配慮するのか。その背景には、過去、長期にわたる友好関係、そして依存関係がある。現代につながるインドとロシアの関係は、ロシアがソ連だった時代、1962年にさかのぼる。この年、キューバ危機が起き、アメリカとソ連の両方が、危機への対応にかかりきりになる中、中国はインドへの攻撃を開始した。中国軍は準備が整っており、投入兵力でインドの3倍、インドは完敗だった。この時、インドは自らの主張であった非同盟主義をかなぐり捨て、各国に支援を要請したのである。そしてアメリカとソ連両方がインドを支援し始めた。

この時点では、インドはソ連依存ではなかった。アメリカとソ連両方がインドを支援していたからである。アメリカはインド支援のために空母を派遣したし、空軍の教官なども派遣して、インド軍強化に努めた。しかし、このアメリカとの友好関係はわずか3年で終わりを告げる。

3年後の1965年、インド軍の急速な強化を懸念したパキスタンが、インド軍が強化される前にインド攻撃を始める。こうして第2次印パ戦争が始まると、印パ両方を支援していたアメリカは板挟みになる。そして、印パ両方に対して武器禁輸を実施した。これは、第2次印パ戦争の鎮静化には一定の効果を

上げたのだが、外交的には大きな打撃をもたらした。インドとパキスタンの両方が、アメリカに対する信頼を失ったからだ。以後、パキスタンは中国との関係を強化し、インドはソ連に傾斜していったのである。

### (2) パキスタンを支援する米中とインドを支援するソ連

決定的な転機になったのは、1970年代はじめである。当時、パキスタンは、現在のパキスタンとバングラデシュ2つ合わせた国であった。しかし、第2次印パ戦争の負担であえぐパキスタンにおいて、現代のバングラデシュにあたる地域が独立を求めるようになる。パキスタン政府は独立運動鎮圧のため軍隊を投入し、苛烈な弾圧の結果、インドに1000万人もの難民が押し寄せる事態となった。これは現地住民を上回る人数で、インドはこれを「人口学的侵略」と判断、パキスタンに対する戦争を決断し、その準備に入った。準備は9か月に及んだ。そして、その9か月の間に、インドはソ連と事実上の同盟関係に入ることになったのである。

当時、インドにとって懸念すべき事項は、もしインドがパキスタンを攻撃した場合、中国がパキスタン側に立って、インドに対して攻撃してくることであった。そこで、中国がインドを攻撃してきたら、ソ連が中国を攻撃する体制を整えることを目指した。それが1971年に締結された印ソ平和友好協力条約である。これは事実上の同盟を意味する内容であった。

一方、アメリカも動いていた。アメリカは、中国とソ連の対立を見て、中国と協力してソ連を封じ込める方法を探っていた。そしてパキスタンに着目した。当時パキスタンはアメリカと中国、両方と国交があったからだ。当時のヘンリー・キッシンジャー米安全保障問題担当大統領補佐官は、パキスタンを訪問し、そこで病気になったことにして長期に療養した。実際には元気で、建物の裏口からでて、パキスタン大統領専用機に乗って中国を訪問し、当時のニクソン米大統領訪中をアレンジをしていたのである。

1971年12月、第3次印パ戦争が始まると、インドはバングラデシュ全土を占領して独立させ、わずか2週間で勝利した。ソ連は、その間、インドを

支援し続けた。一方、アメリカは、邦人保護を名目に、パキスタン支援を開始、空母を派遣、海兵隊にも攻撃準備を命じた。米中パと印ソが対決する構図が成立していったのである。

### (3) ソ連のアフガニスタン侵略が助長

米中パと印ソの対立という構図は、1980年代にさらに深まっていく。それは、1979年にソ連がアフガニスタンに侵攻したことに起因する。ソ連がアフガニスタンに侵攻すると、アメリカはアフガニスタンのゲリラを支援することにする。そして、パキスタンを経由して、大量の武器をアフガニスタンに届け始めた。

ソ連は、このアメリカからアフガングリラへの支援を遮断しようとした。そして、インドを支援することにしたのである。もしインドが軍事力を増強し、パキスタンを攻撃する姿勢をとれば、パキスタンは武器が欲しくなる。パキスタンでは、アメリカからアフガングリラを支援するための武器が大量に移動しており、パキスタンは、それを自らのものにしてしまいたくなる。結果、アフガングリラには武器が届かなくなるのである。

1980年代、ソ連はインドに大量の武器を引き渡した。インドには次々と最新型の武器が到着した。そして、それらの武器を使ったブラスタクス大演習を行い、パキスタンに対しての、戦車部隊を使った大規模攻撃の体制を整えていくのである。こうしてインド軍は、ソ連軍の武器に深く依存する体制になったのである。

その後、1991年、ソ連が崩壊、ソ連依存のインドは大きな打撃を受けた。経済に打撃を受けたインドは、しばらくは新しい武器を買えず、旧ソ連製の武器を保有したままの状態であった。こうして現代につながっていくのである。

## 3. 現代のインドにとってのロシアの重要性

インドは上記のような歴史的経緯をもって、ソ連とのつながりを構築し、ソ連崩壊後のロシアとの関係も続けてきた。結果、現在においても、3つの点で、ロシアに依存している状態にある。

### (1) ロシア製兵器への依存

まず、インド軍が保有している武器の約半分が旧ソ連ないしロシア製である。これは、インドがロシアに強く依存していることを意味している。それはなぜかということ、武器は、最新鋭の鋭敏な装置であるにもかかわらず乱暴に扱う。そのため、いわばパソコンをたたきながら使うようなもので、すぐに壊れてしまい、専属の整備部隊が常に修理して使うものである。そのため、修理部品の供給が大事になる。常にロシアから修理部品を供給してもらえないと、インドは武器を動かすことができない。

現時点では、インドの武器は約50%が修理中である。つまり、ロシアからの修理部品の供給を待っている。これが何を意味しているかということ、もし、インドが、例えば中国やパキスタンに対し、大規模な軍事作戦を行う場合、急ぎ、ロシアから修理部品の供給を受けないと、実施できない。つまり、インドが大規模な軍事作戦を実施するかどうか、ロシアが決めることができることになる。

第3次印パ戦争でインドがパキスタン攻撃の準備をした際に、この問題が露呈したことがある。当時、インドの戦車は70～80%が修理中の状態であった。そこで、インドは国内で新規戦車の製造を止め、修理部品の製造に回すとともに、ソ連に急ぎ修理部品を注文した。インドがパキスタン攻撃のために必要とした修理部品は、ソ連の輸送機によって運ばれたが、航続距離が足らなかったため、途中、パキスタンのイスラマバードで給油して、インドに修理部品を運んできた。インドにとってソ連の存在は重要であった。

さらに、インドの場合、正面装備、例えば戦闘機や戦車について、ロシア製の装備が多い。正面装備は弾薬を消費するため、弾薬の補給が必要になる。ロシア製装備が多くを占めることは、つまり、インドが、ロシアからの弾薬の供給に依存していることを意味しており、その点でも、インドの安全保障はロシアが握っている。

しかも、話はこれでは終わらない。インドは武器の更新時にも、ロシアを必要としている。それは、他の国が躊躇するような武器を、ロシアはインドに供給してきたからである。例えば、独立以来、インドは潜水艦の保有を考えてきたが、イギリスもアメリカもインドに潜水艦を引き渡すことには躊躇して